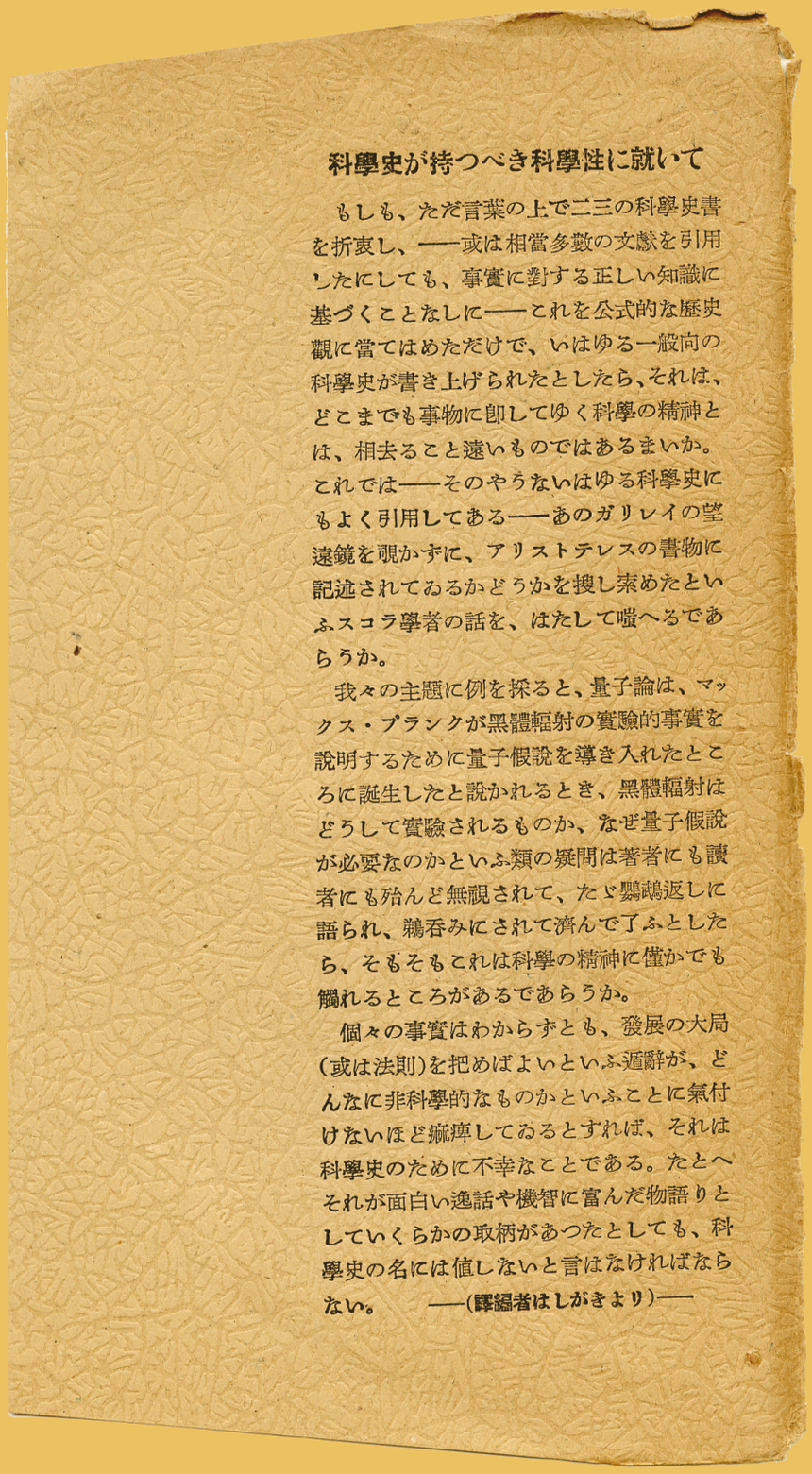
東京工業大学博物館　常設企画・新規収蔵資料公開

『天野清の人と仕事』

展示期間・場所　平成 24 年 2 月 1 日（水）～7 月末頃までを予定
東京工業大学博物館・百年記念館 2 階　展示室 207 内

開室時間　月～金　10 時 30 分～16 時 30 分（祝日・閉館日を除く）

監修・協力　高田誠二（北海道大学名誉教授）
山崎正勝（本学名誉教授）
中島秀人（本学社会理工学研究科教授）
梶　雅範（本学社会理工学研究科准教授）



科學史が持つべき科學性に就いて

もしも、ただ言葉の上で二三の科學史書を折衷し、――或は相當多數の文獻を引用したにしても、事實に對する正しい知識に基づくことなしに――これを公式的な歴史觀に當てはめただけで、いはゆる一般向の科學史が書き上げられたとしたら、それは、どこまでも事物に即してゆく科學の精神とは、相去ること遠いものではあるまいか。これでは――そのやうないはゆる科學史にもよく引用してある――あのガリレイの望遠鏡を覗かずに、アリストテレスの書物に記述されてゐるかどうかを捜し索めたといふスコラ學者の話を、はたして嗤へるであらうか。

我々の主題に例を採ると、量子論は、マックス・プランクが黑體輻射の實驗的事實を説明するために量子假説を導き入れたところに誕生したと説かれるとき、黑體輻射はどうして實驗されるものか、なぜ量子假説が必要なのかといふ類の疑問は著者にも讀者にも殆んど無視されて、たゞ鸚鵡返しに語られ、鵜呑みにされて濟んで了ふとしたら、そもそもこれは科學の精神に僅かでも觸れるところがあるであらうか。

個々の事實はわからずとも、發展の大局（或は法則）を把めばよいといふ遁辭が、どんなに非科學的なものかといふことに氣付けないほど痲痺してゐるとすれば、それは科學史のために不幸なことである。たとへそれが面白い逸話や機智に富んだ物語りとしていくらかの取柄があつたとしても、科學史の名には値しないと言はなければならない。　――（譯編者はしがきより）――

『熱輻射論と量子論の起原』天野 清 訳編（昭和 18 年／大日本出版株式会社）はしがきより

天野清（1907-1945）は，著書『量子力学史』で知られる。戦後，量子力学に関心のある学生に広く読まれた書である。坂田昌一（2008 年ノーベル物理学賞受賞者の益川敏英と小林誠の恩師）や武谷三男といった同時代の物理学者も，彼の諸著作に注目していた。

天野は，東京帝国大学理学部物理学科を卒業後，九州帝国大学工学部助手を経て，商工省中央度量衡検定所に奉職した。終戦の年である 1945 年の 4 月，空襲により夭折したが，その前年に彼は，東京工業大学の助教授となった。

焼失を免れた天野の遺蔵資料は，高田誠二・北海道大学名誉教授（中央度量衡検定所を引き継いだ計量研究所に戦後勤務）に寄託され，整理分析が進められていた。このたび，天野家のご厚意を得て，この遺蔵資料が，天野のかつての職場である本学の大学博物館（百年記念館）に寄贈された。今回の展示は，資料の寄贈を記念するとともに，この事実を社会一般に知らしめるために企画するものである。

東京工業大学博物館・百年記念館
〒152-8550　東京都目黒区大岡山 2-12-1, E3-10
東急目黒線・大井町線，大岡山駅下車，徒歩 1 分
（東京工業大学大岡山キャンパス正門すぐ）
URL　http://www.cent.titech.ac.jp/